

Title	『子やす物語』考：諸本と典拠
Sub Title	A study of Koyasu monogatari : the extant texts and source
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.1 (2022. 12) ,p.43 (186)- 59 (170)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	屋名池誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『子やす物語』考

— 諸本と典拠 —

恋田 知子

豊かな想像力と神仏への信仰に支えられた中世の物語は、巷間に語られた一方で、絵巻や絵本としても盛んに読み継がれた。芸能や説法との重なりから口頭による伝承を踏まえていることは明らかであるが、多種多様な文献に拠りながら書物に仕立てられたこともまた疑いない。どのような意図のもとに如何なる文献を用いて物語草子となったのかを探ることは、物語を生み出し、あるいは享受した場を考える上でも欠かせない。そのような制作の諸相が窺える作品に『子やす物語』がある。二面八足の男女児が苦難の末に子安の地蔵となるまでを描き、子安の塔で知られる清水寺末寺の泰産寺、および丹波国老の坂の子易地蔵の縁起伝承を説く。現代の我々には馴染みのない物語であるが、江戸前期には複数の絵入り本が制作され、後に浄瑠璃や歌舞伎で人気を博す「清玄桜姫物」の淵源にも位置づけられることから、かつては相応に親しまれたようである。

双体男女児の受難と地蔵の縁起伝承という基本構造は同じくしつつも、時代設定や人名、物語展開などの異なるA・B二系統の伝本が知られ、濱中修氏^①や小松和彦氏^②による作品研究が提示されている。先行研究では専ら異形なる子どもに注目が集まり、鬼子や福子の伝承、道祖神や地蔵信仰といった側面から考察がなされてきた。^③一方、近世文学の研究では、とくにB系統の諸要素や文辞に古浄瑠璃『一心二河白道』との共通性が認められることから、近松門左衛門『一心二河白道』や山

東京伝『桜姫全伝曙草紙』など、後世多様な展開を遂げる「清玄桜姫物」への影響も論じられている。⁽⁴⁾ さらに近時、齋藤真麻理氏によって、国文学研究資料館蔵『子易の本地』上巻原表紙裏に『なぐさみ草』の版本の紙片が補強に用いられていることが指摘され、また同時期に複数の豪華絵巻に仕立てられた『大黒舞』との関係について考察されており、江戸前期における絵巻制作の具体相を示す点でも見過ごせない。

このような研究状況を踏まえ、現存諸本を整理しその特色を明示するとともに、とくにA系統の本文分析により従来指摘されてきた典拠を再検討し、物語の成り立ちと意義について考えてみたい。

一、現存諸本の整理と諸問題

本作品には、現在のところ江戸前期を遡る古写本は見出せないものの、計八本の伝本が確認でき、内容からA・B二系統に大別される。各系統で「子安」と「子易」に区別される傾向が窺え、本稿では両系統を総称して「子やす物語」の表記を用いることとする。以下、諸本の書誌とともに収録刊行書などの情報を付す。

A系統 清水寺末寺の泰産寺の縁起伝承

①ハーバード大学美術館蔵『子安物語』（寛文・延宝頃）写、絵巻二軸。表紙改装。外題「子安物語 上（下）」（金泥下絵入りの原題簽に墨書）。上巻、天地三二・三糰×全長三六八二・〇糰。下巻、天地三二・三糰×全長一七一五・三糰。鳥の子紙金泥下絵。字高二六・三糰。「朝倉重賢」筆。絵草紙屋小泉印跡（消去の痕跡あり、全図に雛屋立圃の「松翁」朱印を捺す）。挿絵上巻九図、下巻六図、計一五図。木箱蓋表に「雛屋立圃筆詞共／子安物語絵巻物」と墨書。

* Harvard Art Museum digital collection にて各巻一図公開。

<https://harvardartmuseum.org/collections/object/192084>

②リンデン博物館蔵『子安物語』（寛文・延宝頃）写、絵巻二軸。薄茶地草花文様金欄表紙原装。見返しは金紙に雷文繫ぎ地丸花文型押。外題「子安物語 上（下）」（金泥下絵入りの原題簽に墨書）。鳥の子紙金泥下絵。挿絵上巻九図、下巻七

図、計一六図。

* 『いまは昔むかしは今5人生の階段』(福音館書店、一九九九年)に絵のみ全図掲載。

- ③ ニューヨーク公共図書館スペンサーコレクション蔵『子やす物語』(元禄頃)写、絵本三帖。胡蝶装。紺紙金泥表紙原裝。外題「子やす物語 上(中下)」(金泥下絵入りの原題簽に墨書、上冊は摩滅で判読不能)。縦二三・六種×横一七・五種。見返し、本文共紙。鳥の子紙金泥下絵。上冊一七・五丁、中冊一九・五丁、下冊一九・五丁。一〇行。字高一八・二種。挿絵、上冊六図、中冊六図、下冊六図、計一八図(現在は上冊と中冊の絵を互いに貼り誤る)。各冊末の白紙表右下に「佐藤氏」と墨書。赤木文庫旧蔵。

* 『室町時代物語集』第四(井上書房、一九六二年)所収。

* NYPL DIGITAL COLLECTIONS に一部画像公開。 <https://digitalcollections.nypl.org/items/82ad43248-a68f-47b1-e040-e00a180633c1>

- ④ 赤木文庫旧蔵『子やす』(江戸中期)写、大一冊。現蔵者不明。外題「子やす／一寸ほうし」。内題「子やす」。縦二五・四種×横一七・九種。二三丁。一二行。挿絵なし。「文鳳堂雜纂」八十三。「一寸法師」と合綴。

* 『室町時代物語大成』第五(角川書店、一九七七年)所収。慶應義塾大学斯道文庫マイクロフィルム参照。

B系統 丹波国老の坂の子易地蔵の縁起伝承

- ⑤ 赤木文庫旧蔵『子易物語』寛文元年(一六六一)林長右衛門(京)刊、半紙本二冊。表紙改装。外題なし。上冊内題「大江坂子易物語 上」、下冊内題「清水子易物語 下」。縦二二・五種×横一六・八種。巨郭単辺(縦一九・六種×横一四・二種)。上冊一三丁、下冊一一・五丁。一二行。挿絵上下各見開き一図、片面三図、計八図。

* 『室町時代物語大成』第五(角川書店、一九七七年)所収。慶應義塾大学斯道文庫マイクロフィルム参照。

- ⑥ 白百合女子大学図書館蔵『大江山子易物語絵巻』(寛文・延宝頃)写、絵巻二軸。表紙改装。外題・内題なし。上巻、天地三一・六種×全長一〇二一・七種、下巻、天地三二・六種×全長一〇一五・八種。鳥の子紙金泥下絵。字高二六・六

糶。挿絵上巻六図、下巻七図、計一三図。上巻末に「土佐光起」の壺型朱印。木箱蓋表に「土佐光起絵巻」と墨書された題簽を付す。

*白百合女子大学図書館貴重書画像データベースにて全冊公開。

<https://www.shirayuri.ac.jp/lib/about/collection/emaki/ooeyama01-1.html>

*室城秀之ほか「白百合女子大学図書館蔵『大江山子易物語』」(『白百合女子大学研究紀要』三四、一九九八年)

⑦国文学研究資料館(碧洋白田甚五郎文庫)蔵『子易の本地』(寛文・延宝頃)写、絵巻二軸。緑地丸竜文様金欄表紙原装(上巻原表紙補強に『なぐさみ草』版本紙片)。見返し、金布目地。外題「子易の本地 上(下)」(金泥下絵入りの原題簽に墨書)。上巻・天地三三・三×全長一一九一・五糶、下巻・天地三三・三×全長一二二四・六糶。鳥の子紙金泥下絵。

字高二六・〇糶。「朝倉重賢」筆。挿絵上巻六図、下巻七図、計一三図。下巻後半に一部錯簡あり。桐箱蓋表に本文同筆で「子易の本地」と付す。上下巻末左下に「月明荘」朱印。反町茂雄旧蔵。

*国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースにて全冊公開。

<http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200032458>

⑧石川透氏蔵『子易物語』(寛文・延宝頃)写、絵巻一軸(存下巻)。紺地紅葉鹿文様金欄表紙原装。題簽を付すが書名部分の料紙が剥がれており不明。見返し、金布目地。天地三三・一×全長一二五八・九糶。字高二六・〇糶。鳥の子紙金泥下絵。(浅井了意)筆。挿絵、七図。

夙に③スペンサーコレクション蔵本、④赤木旧蔵写本、⑤赤木旧蔵版本が知られていたため、先行研究では両系統のうち③、⑤をもとに論じられてきた。近年各機関でのデジタル画像公開が進み、両系統各々四点、計八点の伝本が確認され、いずれの系統でも寛文・延宝頃に数多く制作された美麗な大型絵巻を含むことがわかる。A系統のうち、①ハーバード大学美術館蔵および②リンデン博物館蔵の絵巻では、従来知られた③④とは異なり、本文や絵画化される場面に多くの共通点が見出される。加えて後述のように、③④には見えないが、①②に共通する独自記述もあり、両書は近い関係にある。なお石

川透氏によれば、①の詞書は朝倉重賢の筆跡と推測され、絵には雛屋立圃の印が捺されるが立圃筆とは認められず、絵草紙屋小泉印の消された跡が窺えることから、後世偽印によって立圃画と仕立てられた可能性が指摘される^⑥。

一方、B系統では従来⑤の版本のみが知られていたが、⑥白百合蔵絵巻が紹介され、さらに⑦国文研蔵絵巻、⑧石川透氏蔵絵巻が加わり、A系統だけでなくB系統でも豪華絵巻が複数仕立てられていたことがわかる。なお版本については現在⑤が知られるのみだが、元禄九年の書籍目録^⑦によれば、かの正本屋山本九兵衛が求版したことが窺え、当時は版本も相応に流布していたらしい。

B系統諸本間の異同は、前述のA系統諸本間のそれとは異なり、些細な字句や用字の相違に留まるもので、本文は固定している^⑧と見てよい。版本で文意不明なところを修正したと思しき箇所もあり、同時期の他の絵巻や奈良絵本の多くと同様、版本をもとに仕立てられた絵巻と推察される。ただし、絵は版本を概ね踏襲する一方で絵巻独自の場面もあり注意される。

この点を含めたB系統の詳細は別稿にて検討する。なお、⑦の詞書は①同様、朝倉重賢筆と推測され、絵については齋藤氏によって同じく重賢筆の詞書を持つ国文研蔵『大黒舞』絵巻の面貌表現との類似が指摘され、重賢周辺の同工房での制作と想定される。加えて⑧は、石川氏の分析によれば、仮名草子作者で寛文・延宝頃の絵巻書写も手掛けた浅井了意の筆と判断され、下巻のみながら重要である。

以上、両系統の各絵巻はいずれも寛文・延宝頃に典型的な豪華絵巻であり、各々に朝倉重賢筆と推される伝本があることから、異なる系統の絵巻が重賢周辺で集中的に制作された可能性が指摘できる。なぜそれほどまでに本作品が絵巻として求められたのか。両系統の骨子は双体男女児の受難と衆生済度の神仏への転生という本地物的展開で共通するが、先行研究の指摘する異形の子どもへの関心や背景の信仰だけでなく、両系統の物語の成り立ちや受容の要因を探ることで、絵巻化の意図も浮かび上がってくる。そこでまずは両系統の構成を比較し、各々の特徴を検討してゆく。

二、両系統の構成と諸本間の異同

いずれも重賢筆と推測される絵巻であることから、A系統では①を、B系統では⑦を例に各々の内容を比較し、以下に対照させた。両系統に共通する部分には傍線を、とくに顕著な相違点には点線を付した。

対照表一

	A系統(①ハーバード大学美術館絵巻)	B系統(⑦国文学研究資料館絵巻)
1	伊弉諾・伊弉冉の国土創生神話と鶴鴿伝承を記し、世の中の不思議の例として清水の子安の地蔵の物語を書き付けるとする。 [1図]	女性の大事である出産の苦しみや催生の湯薬の効能を示し、難産の苦を救い子易平産の大願を起こして日本に垂迹した地藏菩薩の由来を尋ねるとする。 [1図]
2	二条天皇の時代長寛二年永万元年の頃蓮華王院の西に前大納言藤原道宗の娘で七十歳余りの尼が暮らしていた。 ある夜老尼の夢に高貴なる男女が現れ、美しい壺と短冊を渡し、閻魔王の子どもを授けると告げ、それぞれ尼の左右の袖に入っていた。 [2図]	天武天皇の時代、丹波国大江坂の佐伯長者は裕福ではあったが、子宝に恵まれずにいた。 丹波国豊明神に祈願すると夢に翁が現れ、前世津国天王寺金堂の蛇で鳥の卵を食べた報いによると告げられる。願いの不便さに手箱二つを賜る。 [2図]
3	目覚めると夢中の壺があり、尼はその年の六月七日に、何の苦しみもなく出産する。胴は一つで頭二つ手足四つの男女児であった。 [3図]	妻は懐胎するが月満ちても産まれず、瀕死のところ天から降ってきた童子に与えられた薬で平産する。 [3図]
4	夢で得た壺からは無尽蔵に酒が湧き、難産にも効く妙薬で、評判となり財をなす。男女児は酒れき・酒えきと命名。 [4図]	身は一つで頭二つ手足八つの男女児を産み、玉松丸・玉若姫と名付ける。 [4図]
5	嘉応元年音羽の滝の水が絶えるなどの災いが起こる。老尼が清水寺に参詣すると、災いの真因は応保二年五月四日に生まれた四条辺りの四つ子であり、誤って酒れき・酒えきが捕えられるも必ず守ると観音に告げられる。 [5図]	白鳳九年六月帚星が現れ、灰が降るなどの災いが起こる。天文博士により、災いの原因は丹波国の異常児とされ、捕えられた二人は難波宮に連行される。 [5図]
6	嘉応二年比叡の僧が清水寺を焼き払い、九月に京中の梅桜桃が咲き狂う。天文博士に占わせ原因は四魔にあるという。 [6図]	二人は難波宮に連行される。 [5図]
7	二人は捕らえられ、老尼は涙に暮れる。 [7図]	
8	嘉応二年十月十六日越前守資盛の摂政基房一行への非礼と清盛による報復を契機に京は荒れ、二人の処刑が決まる。二人に仕える吉次は動転し、老尼は清水観音に祈る。 [8図]	子どもを連れ去られた長者夫婦は急に老け込み、それ以降、生の坂を老の坂と称するようになる。 二人に仕える藤中太は難波宮まで付き従い、忠義を尽くす。 [9図]

9	<p>承安元年正月二三日二人は三条河原で処刑されそうになるが太刀が折れ、南方から車輪のような光ものが覆い、身の丈七尺余りの力士に救助される。 [10図]</p> <p>武士達は災いの真因が二人ではなく四条辺りの四つ子であるとわかり、四魔誅伐の勅命が下る。 [7図]</p>	<p>二人は難波の生玉の浜で処刑されそうになるが太刀が折れ、四天王のごとき神たち十六人に救助される。 [6図]</p>
10	<p>老尼と吉次が清水寺に参詣すると、力士は観音に現じ、酒れき・酒えきも帰還する。四条の四つ子が真因の四魔として誅伐され、獄門に晒される。 [11図]</p>	<p>五千余騎を丹波に遣わし、激戦の末、鹿、猿、白鷺、烏、狐の神使の加護もあり、二面八足の鬼神を退治する。 [8図]</p>
11	<p>帝は老尼と酒れき・酒えきを内裏に召し、老尼に六位の侍従を任じた。酒れきは四位の少将に、酒えきは主膳の前として位を与えられる。 [12図]</p>	<p>二人は無事に長者のもとに帰ると身二つとなる。館の乾の蔵から若返りの酒が湧く。帝も献上された酒によつて若返り、二人はそれぞれ五位の中將、内侍として位を与えられる。 [9図]</p>
12	<p>承安二年十一月十七日、少將と主膳の前が蓮華王院に参籠すると本尊の阿弥陀が光り、少將は愛染明王に、主膳の前は地藏菩薩に交じる。 [13図]</p> <p>治承二年二人は契りを結び主膳の前は美しい姫君を産む。成長した姫君は帝に寵愛され、宰相の君として皇子を産む。少將は大納言となるも、出家して能因法師と称す。二人は清水寺参籠の折、子安塔で主膳の前が、奥の院で能因が姿を消す。 [14図]</p> <p>(※②本では地藏の地藏の救済を描いた[15図]を付す)</p>	<p>夫婦となった二人は衆生済度の大願を思い、参詣の女性を難産から救う願を立て、桜の木で地藏を作ると姿を消す。 [10図]</p>
13	<p>長者夫婦は大江坂に御堂を作り子易地蔵として安置。 [11図]</p>	<p>長者夫婦は夢告によつて大江坂と同様の地藏を作り音羽山に安置する。夫婦はそこへ移り住み行叡居士と称す。その後坂上田村麻呂により清水寺が建立され、子安地藏は五重塔に供養される。下つて嘉応二年、延暦寺の僧が清水寺を焼き討ちした際に地藏は火中を飛び出し六波羅近くの田に移る。この奇特に感じた清盛が子安塔を建立する。清盛の娘難産の折には子安塔に安産祈願し、無事平産した。 [12図]</p>
14	<p>建久九年三月三日、宰相の君が産んだ皇子は四歳で即位し、土御門天皇となる。 [15図]</p> <p>(※②本では[16図]に相当)</p>	<p>子安塔は安産利益の神仏として人々の信仰を集めた。 [13図]</p>
15	<p>異形の男女児が誕生し、都の災いの原因として処刑の危機に遭うも太刀が折れ、神仏の救助を経て災いの真因は退治され、男女児の女性が子安の地藏となったとする点は両系統に共通する。加えて、平家物語や清水寺縁起に詳しい比叡の僧による清水寺の焼き討ちについて、A系統では処刑に繋がる都の災いの一例として(対照表7)、B系統では子安塔建立の契機として(対照表15)、共通して取り入れられていることがわかる。時代設定や人名などに相違を見せつつも、両系統が影</p>	

響関係を持つ同一の物語であることは首肯されよう。

なお、A系統の諸本では、都の災いとして額打論に始まり清水寺炎上まで共通して記されるが、①②では対照表8の殿下乗合の一件を詳述するのに対し、③④には記載が見出されない。また、①②では二人が神仏としての正体を示した後に夫婦の契りを交わし、姫君を産んで転生を遂げるのに対し、③④では出産後に正体を現すと簡略化されている。このように、A系統では諸本間でも引用説話の内容や配列に相違があり、書写年次の下る③④は内容面からも①②成立以降に成った伝本と判断される。

次に、対照表1で点線を付した各系統に特徴的な要素のうち、従来さほど重視されずにきた冒頭に注目してみたい。

三、異形の国常立神と夫婦婚合神

A系統では、国土創生神話と夫婦交合みとのまぐわいを示す鶴にわくなぶり鶴にわくなぶりの説話から物語が始まる。①の冒頭は以下のとおりである。

それわがてうは、むかし天神七代いざなぎいざなみのみことのあまのうきはしうへに立給ひ、あをうなばらにのぞみてみそなわしつ、このしたに、あにくになからんやとあまのにゐほこをさしおろし、さぐり給ふに、そのほこのした、りこりかたまり、ひとつのしまとなる。これををのころ嶋と名づけ給ふ。今のあはぢしまこれなり。ほこのした、り嶋とならんがため、うみのなかに大日といへるあんもんすはり、なみのよするひゞきにしんごんのだからにのこゑあり。此ゆへに大日本国といひてしかも神国也。第一の御神をくにとこたつのみこといふ。八つのかしら、八つの手、尾はらは大じやのごとくにして五きやうのとくあり。御とし百千おく万さい。さて又、地神のはじめは天せう太神、御とし二十五万歳。人わうのはじめは神武天皇と申侍き。うみぢにのみことよりおもだるのみことまで、三代は男女のかたちましますといへ共、ふうふこんがうのわかちなかりしところに、いざなぎいざなみのみこと、あはぢしまにあまくだらせ給ひて、にはくなぶりといふとりの尾をうごかしてつちにた、くを御覧じて、ふたりの御神はじめてとつぐことをならひ給ふ。

しかあれども世につたはることはひさかたのあめにしてはしたてるひめにはじまり

とうたはせ給ふ。これらはもじのかずもさだまらず、歌のやうにはなけれども、これを和歌のはじめといふ。又いまのはくなぶりをいなおほせどりともいふにや。神明の御歌に、

あふことをいなおほせ鳥のをしへずば人はこひちにまよはざらまし〔第一図〕

されば、このふたりの御かみをふうふさいあひの御神として万物のち、は、とす。松の葉のちりうせずして、今すゑくの人、たつときもいやしきもこのながれならずといふことなし。しかるに、神代よりじんむてんわうまでは、世の中にめづらしきふしぎどもおほかりき。なかんづく、わがてうへぶつぼうのわたるべきじせつには、ふしぎなをおほしとみえたり。これみなぶつばさつのごんげとうらいして、しゅじやうさいど、はうべんのためなるといへども、でんきにしるせるを見、み、にふれつるばかり也。今もくぜんにあらはれ、ふしぎをあらはし給ふは、きよみづちかきこやすの地ざうにておはします。あまりにふしぎなるゆへ、すゑの世の物がたりにもがなとかきつけ侍る也。¹⁰

日本書紀に基づく国土創生神話に始まり、海中出現の大日如来の印文によつて大日本国の由来を説く言説は、軍記物や能、幸若舞曲など中世文芸の諸書に見出せる。¹¹同様に、伊弉諾・伊弉冉が性交を学んだとする鶴鶴説話も日本書紀以降、説話や物語に記され、古歌に多く詠まれたことから中世の歌学書に散見される。¹²A系統の冒頭は一見するとそうした諸書に見える中世日本紀の言説を取り込んだかに思われるが、たとえば二神が天の浮橋から指し下ろしたことで著名な天の瓊矛（中世神道では「とほこ」）を天の「にあほこ」とするなど、中世の諸書とは異なる記述が少なからず見え、注意される。

なかでも、天神第一の国常立尊を「八つの頭、八つの手、尾腹は大蛇のごとき」とする点は諸書とは大きく異なり、注目に値する。¹³②の絵巻第一図でも、鶴鶴を指さす伊弉諾・伊弉冉の上空に天照大神とともに泥土煮尊・沙土煮尊・面足尊・惶根尊の四神が描かれるが、八頭八手の蛇体で大きく描写された国常立尊の姿はひときわ目を引く。

早く南北朝期の妙法院蔵『神像絵巻』には、「第一国常立尊。四面四臂四足。（中略）第二国狭槌尊。三面六臂六足。（中略）第三豊斟淳尊。八面八臂八足」と記され、四面四臂四足の国常立尊の姿も描かれる。¹⁴多面多臂の国常立尊像は近世以降



図 ハーバード大学美術館蔵『子安物語』(1985. 559) 上巻第1図

の神道灌頂の本尊図にも受け継がれるが、八頭八手の大蛇を描く例は管見の限り①②の巻頭図のみである。なお、慶應義塾図書館蔵『住吉縁起』には国常立尊を八頭八手の大蛇と記しており、伊弉諾・伊弉冉の天地開闢から物語が始まる点でもA系統と共通する。

ただし、伊弉諾・伊弉冉によって物語を語り起こすのは、『太平記』「三種の神器来由の事」や幸若舞曲「百合若大臣」など中世文芸にしばしば見え、いわば常套表現であった。しかし、A系統の冒頭ではこれから展開する異形の男女児の布石として多面多臂の国常立尊を特筆するのであり、『住吉縁起』などの文脈とは明らかに異なる。同様に鶴鴿説話でも伊弉諾・伊弉冉を「夫婦さいあひの御神」とする点は諸書には見えず、注意される。

中世の諸書に見える常套表現ではなく、あえて異なる描写により異なる文脈で国土創生神話を巻頭に据え、本文と絵の両方で詳述する点からしても、物語の展開上重視された冒頭と捉えるべきであろう。では、A系統の創作かという点ではなく、実は室町期の雑史『神皇正統録』に同内容の記事を見出すことができる。

四、A系統の典拠の再検討

天神七代から後鳥羽天皇に至る諸事を仮名混じりの編年体で略記した『神皇正統録』は『神皇正統記』を模した室町期の雑史であ

り、真福寺藏〔室町末期〕写本を始め、米沢市立図書館〔藩学興譲館〕藏〔江戸初期〕写本や熊本大学附属図書館〔細川家北岡文庫〕藏写本など複数の伝本が知られる。雑史とは言え、各伝本の書写年次が比較的古い点や伝襲の場も注意され、この種の雑史の流伝の実態にはなお注意して考察を深めたい。

数詞を除き総ルビに近い米沢市立図書館蔵本に顕著なように、諸本を通して同筆で多くの訓みを付し、共通する訓みも多い。試みに真福寺蔵本の巻第一より対応箇所を示すと以下のとおりである。

天神七代 第一国常立尊 陽ノ御神也、天地ヲ開ケテ始ル之時空ノ中ニ生ス、一物ヲ其状如葦、牙便化爲神、即此ノ尊ト是ヲリ、八ノ頭ヲ、八ノ手足、腹ト尾、如大蛇在、五行之徳御年数、凡百千億万歳ニ而テ無レ始无レ終。第二国ニ狭槌ノ尊ト 陽ノ御神也、御年数凡八百億万歳 第三豊斟淳尊 陽ノ御神也、御年数凡八百億万歳 第四泥土煮尊 陽御神也 沙土煮尊、陰御神也、二 神 御年数凡二百億万歳 第五大戸道尊 陽ノ御神也 大苦辺尊 陰ノ御神也、二神御年数凡二百億万歳 第六面足尊 陽ノ御神也、惶根尊、陰ノ御神也、二神御年数凡二百億万歳、從泥土煮尊至リテモ 面足ノ尊ニ三代、雖モ在ト 男女之形无ニ婚合一之義 第七伊弉諾尊、男ノ神也 伊弉冉尊、女ノ神也 二 神 御治曆、凡ソ二万三千四十歳、是陰陽都合之大数也、无レ始モ无レ終モ、此男女ノ御神、凡万物ノ父母也云々、昔天マ之浮橋之上ニ而共ニ相議 曰、此下クニ豈国无ニ乎トテ、天マ之瓊ヲ指シ下而之レヲ探給フニ青海アリ、其ノ銚ノ滴凝堅リテ一ツノ之島ト成レリ、之ヲ磯馭盧島ト名ツク、時ニ一ツノ洲ヲ出生シ給マ、淡路洲是也、二リノ御神其島ニ天降給テ、夫婦交合ノ義ヲ成シ給マ、茲ニ因リテ此ノ二リノ神ヲ以テ婚合之始メトス、二リノ御神即天マカ下クニ於テ、大八洲ヲ定メ山海ミ江河草ヲ木ヲ造リ給ク、又議リテ曰ハク、豈国ニ主无ニ乎トテ、即一ニ女三男ヲ産給フ、所謂日神、月神、蛭見、素盞烏ノ尊是也、(中略) 其後二リノ御神者、淡路国ニ宮造而隠レ給ヒヨシス、以上 天神七代 第一天照太神 女体 御治天凡二十五万歳ニ而无レ始无レ終、是伊弉諾尊之御女也

太字で示したように、国常立尊の描写のみならず、「天マ之瓊ヲ」に「ニイホコ」と付すなど細かな点でもA系統との一致が見てとれる。とくに伊弉諾・伊弉冉を「万物ツノ父母」とし、「夫婦婚合」や「夫婦交合」に「サイアヒ」と繰り返し付す点は前掲①の冒頭に通じるものがあり、『神皇正統録』に見える中世日本紀の言説を取り込んだ可能性が考えられる。

これまでA系統の典拠は、濱中氏により『百練抄』記事との類似が指摘され、共通理解されてきた。しかし、冒頭における『神皇正統録』記事との酷似を踏まえるならば、改めて典拠について検討する必要がある。

A系統には、前述の都での災いの記事を含め、年月日を付す箇所が散見され、確かに『百練抄』記事との類似が見てとれる。当該箇所について『神皇正統録』と照合すると、左記のとおり『百練抄』記事以上に共通性が認められるのである。

対照表 II

①ハーバード大学美術館蔵『子安物語』絵巻	神皇正統録(真福寺蔵写本)	百練抄(国史大系)
<p>いはゆる人王七十八代、長寛二年永万元年、二条院御宇に都蓮華王院の西に住む者あり。その年七十余りにして俗称を尋ぬるに大納言藤原朝臣道宗卿女と聞えける。(略)永万元年乙酉六月七日にほとんど悩む事なふ子を産めり。尼君驚き、こはそも浅ましや、年高き身の殊に出家の身としてかやうの事人のみ聞かんも恥づかしく早く捨てばやと思ひて取り上げ見れば、かたち人に変はり胴は一つにして頭二つ手四つ足四つなり。胴は二つなれども脇の下にて思ひの絆ゆへに二枚屏風の如くなり。(略)また夢に得たりし壺より甘酒湧き出でたり。これを舐めてみればその味ひ甘露の如くにして汲むに尽くることなし。又の日は濁り酒といふものになり。その味五味にして甘露なり。</p>	<p>永万元年乙酉ノ歳或女、頭二、手四、足三ツアルヲ生ム、之ヲウラウニ占、兵乱之兆也、(略)同年六月七日洛、蓮華王院、西ノ砌ニ於テ、サケノイツミ、ワキイヅル、ニコロサケ、アマサケ</p>	<p>永万元年長寛三六五改元(略)四月十二日。近衛河原辺有異児。胸已上二体也。頭二手四也。胸已下一人也。令諸道勘申和漢之例。(略)六月八日。蓮花王院西砌體泉涌出。承仕有夢想。貴賤汲之。</p>
<p>さるほどに嘉応元年己丑の春清水音羽の滝絶え失することあり。</p>	<p>嘉応元年己丑歳ノ春三月洛東山清水ノ滝絶へ失ル</p>	<p>嘉応元年己丑(略)三月廿六日。近日。清水寺滝水枯失。</p>
<p>去んぬる応保二年壬午の五月四日に一人の女一同に四人の子を産む。これ四魔なり。一つに天魔、二に煩惱魔、三つに五蘊魔、四に天子魔この四魔は心経陀羅尼にも恐れず、王宮を悩まし仏法を妨げんために。兄弟となり人倫に交わり四条の辺に住む。</p>	<p>同(応保)二年壬午ノ歳、一女、四子生。</p>	<p>長寛元年五月七日春日高倉下女誕四子。男三女一。同日梅小路烏丸女同誕四人。</p>
<p>嘉応二年庚寅の年、比叡山の衆徒清水寺に押し寄せて仏具僧坊一宇も残らず皆々焼き払ふ。これは去んぬる永万元年七月廿七日上皇崩御なりて後、御墓所へ渡し奉る時先づ興福寺の額を打ち、その次に延暦寺の額を打つべきところ先づ延暦寺の額を上に取り打ちたる故に、興福寺の西金堂衆観音房勢至房とて聞こふる大悪僧二人ありけるが(略)二人つと走り出て延暦寺の額を切つて落とす、散々に打ち割りし故ほどへ時たるといへどもその遺恨あるが故清水寺は興福寺の末寺たるによつてなり。</p>	<p>同(嘉応)二年庚寅ノ歳比叡山ノ衆徒清水寺ヲ焼</p>	<p>永万元年(略)八月九日。延暦寺僧下洛。焼払清水寺。是二条院御葬礼夜。諸寺念仏群参之時。興福寺僧打破延暦寺額板之故云々。</p>

<p>同年の九月京中の桜、梅、桃、草木の花悉く今を盛りと開くほどに都の貴賤老若ともに袖を連ね、ざざめきあへり。</p>	<p>同年(嘉応二)秋九月、京中、桜、梅、桃、李、花悉く皆開。</p>	<p>嘉応二年(略)九月廿七日(略)近日。京中桜梅李華。</p>
<p>同年十月十六日に清盛入道の嫡子小松殿の二男越前守資盛(略)撰政関白の御出にはなづきに参り給ふ。殿下の御出なるぞ乗物より下りよといへど、あまりに誇り世を世とせざりければ殿下の御出ともいはず、一切下馬の礼儀もなくただ破つて通らんとするを越前守を始めとして待どもを馬より引き下ろし頗る恥辱をぞ与へける。(略)同廿一日にひた甲三百余騎殿下の御出なるに今熊堀河辺にて待ち受け、中に取り込め前駆御隨身どもが髻を切るるとてこれは汝が髻と思ふな主の髻を切るなりといひて六波羅へ帰り参れば入道神妙なりとぞ宣ひける。これぞ平家の滅ぶべき衰相なり。</p>	<p>同年(承安元年)正月廿三日、南方、赤光アリ、大車輪、如シ</p>	<p>嘉路二年七月三日、越前守資盛於路頭。遇撰政及恥辱。(略)十月廿一日、依御元服定。撰政参内之間、於路頭勇士有狼藉事。切前駆等本鳥。是先日資盛之会稽也。</p>
<p>承安元年正月廿三日に荒けなき武士ども二人の幼きものを引つ立て三条河原へ出さる。(略)南方より車輪のごとくなる光り物三条河原に覆ひければ、都は闇とぞなりになける。</p>	<p>同年(承安元年)夏藤原成親、卿、平康頼、俊寛僧都等、東山鹿谷、会所、而多田行綱等之、武士ヲ相語平家追討之謀叛ヲ企ツ、同(承安)二年壬辰歳、十一月十七日、蓮華王院、仏光ヲ放ツ。</p>	<p>承安元年正月(略)廿二日(略)南方有赤光。其勢如車輪。</p>
<p>承安二年壬辰十一月十七日に少将殿主膳の前この世かの世の祈りとて蓮華王院へ参籠在しけるに。その夜は人数多集まりて、去年の夏源氏のかとうと藤原成親、平康頼、俊寛僧都等、東山鹿谷を会所として多田藏人行綱等の武士を語らひ平家を滅ぼさんとの企てなれば(略)阿弥陀十方へ光明赫奕として拜まれ給へば、少将も忽ち愛染明王と現れ給ふ。</p>	<p>同年(承安四年)清水子安塔供養、同年、法然上人源空比叡、山黒谷ヲ出而洛東山ノ麓、吉水ニ遷リ、専修念仏之宗旨ヲ立ル</p>	<p>承安二年十一月十七日蓮華王院御仏脇土中<small>第五開中</small>正面上南放光明。</p>
<p>来甲午年東山の麓吉水にて勢至菩薩源空と名を付き、一向専修の念仏の宗旨を立て衆生に進むる。その時必ず力を添へ給へとの給へば、我々はその為に生じたり。仏も仏力あるべしと答へ給へば、我は源空に大原野にて宗論をさせ衆生のため証拠の阿弥陀といかれんと御約束ある</p>	<p>同年(承安四年)清水子安塔供養、同年、法然上人源空比叡、山黒谷ヲ出而洛東山ノ麓、吉水ニ遷リ、専修念仏之宗旨ヲ立ル</p>	<p>承安二年十一月十七日蓮華王院御仏脇土中<small>第五開中</small>正面上南放光明。</p>

たとえば、永万元年六月七日条の異常児誕生とともに湧いた酒泉について、真福寺蔵本では「醴泉」を「サケノイツミ」と訓み、さらに「ニコリサケ」「アマサケ」と左訓を付しており、A系統でその後甘酒、濁り酒へと変化したとするのに照応する。災いの真因である応保二年の四子の誕生、承安元年の鹿ヶ谷の一件と絡めて翌年の蓮華王院の仏の奇瑞を語る点、さらに法然が吉水で専修念仏の宗旨を立てたとする承安四年に「子安塔の供養」と明記する点は看過できないものがある。

参考に挙げた『百練抄』記事に比しても細かな部分で共通性が見てとれ、A系統は『神皇正統録』記事に拠ったと見てよい。なお、前述の①②のみに見える殿下乗合の一件は、『神皇正統録』に見えず『百練抄』には記されるが、『神皇正統録』をもとに平家物語で補ったと考えられよう。『神皇正統録』については、山下哲郎氏により覚一本系平家物語の引用が指摘されるが、¹⁸⁾『百練抄』記事との共通性や室町期の雑史と物語草子との影響関係など、今後更なる検討が求められる。

五、A系統の絵巻の意義

両系統の比較によりA系統の特徴を抽出すると、やはり異形なるものへの視点の強調が挙げられる。たとえばA系統で老尼が閻魔王より男女児を授かったとする点は雷神の子を産む山姥の伝承を彷彿とさせ、無尽蔵の酒を中心とする展開も物語に数多登場する異界の宝物を思わせる。A系統は物語全体を通して確かに異形なるものを強調するさまが見てとれる。冒頭の国土創生神話も単なる常套表現ではなく、一つには異形の国常立尊によって双体男女児を導く意図があったにはほかならない。そしてもう一つ重要な点に、先の夫婦婚合神の描写があったと考える。

前掲対照表1の12で点線を付したように、B系統では救助後に男女児は身二つとなったと明記するが、A系統ではその点を明らかとせず、神仏の正体を現して比翼連理の語らしいの末に姫君を出産したとする。神仏の契りゆえ身二つか否かは重視されないであろうが、そこにこそ「夫婦婚合」を体現した物語草子としての意義を見出せるのではないか。それは以下の①末尾で本作を「比翼連理物語」と称したとする所以にも通じる。

この帝より代々平らかに治まりしは、菩薩出世の故とかや。されば、この草紙をある人、比翼連理物語といふ。まことに能円法印と主膳の前と肌へ離れず、契り深く在したるは比翼連理に似たり。その故は連理の枝と申すは、木のもとは異なるといへども枝は差し交はして一に吸い付きたるを申すなり。又比翼の鳥と申すは、連理の枝に住む鳥なり。嘴、脚は赤くして翼は白く美しき姿なり。翼世の鳥によう変はりかたがたあり。飛ばんとする時、夫婦の鳥一所に寄り添ふて飛ぶなり。かやうの子細あるゆへ、比翼連理物語といふなるべし。かかるめでたき物語。一遍読みたるその人は、清

水結ぶの神と子安の地藏へ一度参り給ふにむかふべし。又年の初めに読み給はば、男女によらず必ず妻を与へ夫を授け、その上夫婦の中を幾千世万代までもあひかはらず榮へ、妻なき人は必ず読み給ふべし。あに疑ひあらんや。その故は阿耨多羅三藐三菩提心のおればなり。

冒頭から末尾に至るまで本書が一貫して「夫婦婚合」「比翼連理」を体现し、予祝する物語であることを明示する。その上で点線のようにこの物語を読む功德が記され、結ぶの神清水と子安地藏の利益を強調するのである。江戸前期に集中して美麗な絵巻として求められたのは、「夫婦婚合」の予祝というまさに当時の嫁入り本に適った内容であったからであろう。そこには、現代の我々がともすると囚われてしまう「異形なる子ども」への関心よりも、むしろ当時の女性たちの絵巻享受のありようが窺い知られる。

なお前述したように、寛文・延宝頃の豪華絵巻が複数伝存する祝言性の高い『大黒舞』には、本作との関連性が指摘される。⁽¹⁹⁾『大黒舞』諸本に共通して、主人公大悦が参詣した子安地藏の草創を「永万年年に衆生済度のために人倫に交はり、利益を衆生になし給ふ」とする点である。子安地藏の草創を「永万年」とする記述は当時の地誌や寺伝には見えず、齋藤氏はA系統の子安地藏の縁起を取り入れた可能性を指摘する。加えて英勝寺蔵『大黒舞』絵巻の子安塔の参詣場面を掲げ、本文とは関わらない塔前の老尼に、異常児を授かった老尼の物語の記憶をも読み取っている。このような『大黒舞』での受容の様相は、A系統がB系統に先行し流布していた証左となる。『神皇正統録』での言説をもとにA系統の男女児の苦難と地藏の縁起伝承が成され、その骨子を引き継ぎながらも、時代や舞台を変え、老の坂の子安地藏の縁起として時を経ず成り立ったのがB系統と考えられる。

それでは、「夫婦婚合」を体现、予祝する絵巻としての受容を得たにも拘わらず、さらにそれをもとに新たな縁起を語るB系統の豪華絵巻が複数仕立てられたのはなぜなのか。その背景と意義については続稿に譲る。

【注】

- (1) 濱中修「『子安物語』と民間伝承」(『室町物語論攷』新興社、一九九六年、初出一九八三年)。
- (2) 小松和彦「『子安物語』の魅力」(『新日本古典文学大系(月報)』五五、一九九二年)、「『異常児』は異界を覗く「覗き鏡」——お伽草子」と異類婚姻児」(『異界を覗く』洋泉社、一九九八年)。
- (3) 大島建彦「道祖神の信仰と説話」(秋山虔編『中世文学の研究』東京大学出版会、一九七二年)、瀬戸友美「『子安物語』論——地藏信仰を中心に」(『愛知大学国文学』三八、一九九九年一月)、ハンク・グラスマン「『子やす物語』の画像学をめぐる諸問題」(『奈良絵本・絵巻研究』三、二〇〇五年九月)など参照。
- (4) 鳥居フミ子「一心二河白道」の位相」(『近世芸能の研究——土佐浄瑠璃の世界』武蔵野書院、一九八九年、初出一九七四年)、佐藤深雪「『桜姫全伝曙草紙』論——江戸小説と子安の民俗信仰——」(『文学』五一—八、一九八三年八月)、阪口弘之「一心二かびやく道」(信多純一編『赤木文庫古浄瑠璃稀本集——影印と解題——』八木書店、一九九五年)、井上啓治「(中世説話)と京伝のモチーフ・主題」(『京伝考証学と読本の研究』新興社、一九九七年)など参照。
- (5) 齋藤真麻理「奈良絵本と『徒然草』——ジャンルを往還するメディア」(『東アジアにおける知の往還』勉誠出版、二〇二一年)、「『大黒舞』小考」(『国文学研究資料館紀要文学研究篇』四七、二〇二二年三月)。
- (6) 石川透「フォック美術館蔵『子易物語』の印記」(『古典資料研究』二〇、二〇〇九年十二月)。
- (7) 寛文一〇年刊『増補書籍目録』に「子安物語二冊」、元禄九年刊『増益書籍目録大全』には「(二ノ山本九)子安物語」とある。市古夏生編『元禄・正徳板元別出版書総覧』(勉誠出版、二〇一四年)など参照。
- (8) 前掲注(5) 齋藤論文「『大黒舞』小考」参照。なお、①の絵は⑦の面貌表現とは異なる。
- (9) 石川透「奈良絵本・絵巻 中世末から近世前期の文華」(平凡社、二〇二二年)。
- (10) ハーバード大学美術館蔵の原本をもとに私に翻字し、清濁の区別や句読点を施し、適宜傍線を付した。なお、以下の引用では読解の便を図り適宜漢字を宛てた。
- (11) 『沙石集』巻第一——「太神宮の御事」、屋代本『平家物語』剣巻下、「源平盛衰記」剣巻、「塵滴問答」、日本紀注、古今注、謡曲「淡路」「逆針」、幸若舞曲「日本記」など多数見える。伊藤聡「大日本国説——密教化された神国思想」(『中世天照大神信仰の研究』法蔵館、二〇一一年)など参照。

- (12) 西田正宏「いなおほせ鳥」考（『文学史研究』三三三、一九九二年二月）など参照。
- (13) 先行研究では、出雲路修「俱生の神 国常立尊」（『文学』八一、二〇〇七年一月）がこの点に触れる。
- (14) 妙法院史研究会編『妙法院史料』第六卷（吉川弘文館、二〇一九年）所収。伊藤聡「中世日本紀二題」（『むろまち』一、一九九二年一月）など参照。第三神の豊斟淳尊の「八面八臂八足」によって展開した可能性も考えられる。なお、真福寺蔵「大和葛城宝山記」でも多面多臂の始原神を国常立神と解釈する。前掲注（13）出雲路論文参照。
- (15) 原克昭「異神の系譜 越境する神々と日本仏教の位相」（『東アジア仏教学術論集』五、二〇一七年一月）など参照。
- (16) 国文学研究資料館新日本古典籍データベース公開の画像により私に翻字し、句読点を付し、近似する箇所を太字で示した。
- (17) 前掲注（1）濱中論文参照。なお、『百練抄』にも多くの写本、版本が伝存するが、多くの訓みを付す『神皇正統録』諸本とはやはり性格を異にする。
- (18) 山下哲郎「軍記物語と年代記―『平家物語』との関連を中心に―」（『駒沢国文』三五、一九九八年二月）。
- (19) 前掲注（5）齋藤論文「『大黒舞』小考」参照。
- (20) 新日本古典文学大系『室町物語集』下（岩波書店、一九九二年）所収の国文学研究資料館蔵絵巻に拠る。

【付記】

本稿は、二〇二一年度説話文学会一二月例会シンポジウム「図像説話と女」における口頭発表「一七世紀後半の絵巻と女性―『子易の本地』を例として―」の前半をもとにまとめたものである。ご教示いただいた先生方に御礼を申し上げる。B系統の分析を中心とする後半については、『説話文学研究』第五八号（二〇二三年七月刊行予定）の拙稿を参照されたい。貴重な資料の閲覧のご許可を賜った所蔵者各位、図版掲載のご許可をいただいたハーバード大学美術館に深く感謝申し上げます。

なお、本稿はJSPS科研費（課題番号19K00313、20H01235）による成果の一部である。